

---

# ヘルマンとコンラード

水乃ヘルギ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヘルマンとコンラード

### 【Nコード】

N0299A

### 【作者名】

水乃ヘルギ

### 【あらすじ】

お金持ちの坊ちゃん、ヘルマンは英雄と名高いコンラードに憧れ、彼についていってしまう。コンラードの秘密は賢者の石にあった。そしてコンとソラとの不思議な関係。お楽しみに。

## 登場人物

西暦1400～1500年代、欧州でのこと。

世間では大航海時代だの、十字軍遠征の第何回だのが始まつたりで、ちつとも落ち着きがない。

お金持ちの息子のヘルマン様は、英雄と呼ばれるコンラードが大好きであこがれていた。

「僕も英雄になりたい〜いん！」

はてさて、ヘルマンさん、いったいどんなことに巻き込まれるのでしょうか……。

### 【ヘルマン・フリードリヒ・アウレリア】

この物語の第二主人公。つまり語り部。

ブルガリア帝国所属の騎兵団長を父に持つ。

十七歳。

### 【コンラード】

本編の主人公。

性格は、めっちゃワル修道士。

どのくらいかというと、皇帝さんを足蹴にするほど、である。十八歳くらいに見えるが、じつはもっと長生き？

### 【ソラ】

空色に光る勾玉を持つ少女。

生まれは日本。出雲王朝の生き残り。  
なぜコンラードと一緒に行動しているのか、謎。  
十五歳くらい。

## 【ユリアヌス】

神聖ローマ帝国皇帝。

コンラードのことを尊敬していたが、あることをきっかけに指名  
手配する。

そしてソラを欲する。

## 登場人物（後書き）

これって、一度公開しないと次が書けないんだね……。  
だから途中で内容がリタイアする羽目に。しくしく。

## ヘルマンの誓い

ヘルマンはブルガリア帝国一の騎兵団長を父に持つ、名家の貴族だった。

だった、というのは、もうすでに伯爵の地位を失い、彼は結果的に、父を裏切り、国を裏切ってしまったのだから。

しかし彼は後悔などしてはいなかった。  
なぜなら、支えあう仲間がいたからである。

「よう、ヘルマン！」

ひとり目は、船上でタバコをくわえながらにっこり微笑む少年、コンラードだった。

彼は謎の多い人物で、ヘルマンの憧れでもあった。

というのは、コン、つまりコンラードは皇帝さえもしのぐといわれる知識を持ち、さらには武勇に優れてもいた。

もうひとり、黒髪で黒い瞳の東洋人。

しっとりとした美しい少女であった。

名を、ソラといって、彼女は空色に光る勾玉をいつも、大事そうに首からさげていた。

「コン。僕はもう迷わないよ」

と、ヘルマンは言った。

黙ってうなづくコン。しかしその表情は、引き締まっていた。

「僕は逃げたくない。逃げるわけにいかなくなっただね」

ソラもそうよ、といった。

ヘルマンは父を裏切ってしまった。

そして皇帝も……。

ブルガリア帝国を裏切ったせいで、父はさらし首にされたと噂で聞いた。

なぜこうなったのかと、ヘルマンは自分を恨んだが、コンに説得されて立ち直ることができた。

「お前が自分で決めたんじゃないのか。もし違うというのなら、ここで別れてもいいんだぜ」

だがヘルマンはコンを頼りにしなければ、路頭に迷う身分になってしまっていた。

「わかったよ、コン。僕は、まだ君たちと行く！」

「あれからお前の顔立ちが、以前の不拔けた顔とは違って見えるぜ。過去を回想していたヘルマンは、はっとしてコンを見た。

「まぶしいね、あの夕陽のようだ」

コンは水平線を指差した。

真っ赤に燃える太陽が、きらきらと周囲を照りつけながら沈んでいく。

「あなたの……いいや、コン、きみのことをすべて知りたかったんだ。僕は」

コンはタバコをポロリと落とした。

「な、なにいつてんだ、おめえ。気色悪いこと抜かしてんじゃないよ！」

「あははは、ごめんごめん。勘違いしないでくれ、僕はそういう意味で言ったわけじゃない。あなたがまさか、偉大な修道士様であるうとは、どうして僕が気づけたろうか。いまさらなんだけどね、コン。僕がきみに力を貸す気になったのは、そのことがあっただけじゃないけれど。……最後まで見届けるからね、きみの行いを！」

「ああ、まあ、見ていてくれ」

コンは沈む夕陽にタバコを投げ捨て、ニヤリと笑ってから、言った。

## ヘルマンの誓い（後書き）

コン………修道士の癖に海賊家業とは………。  
コイツ只者じゃないですねえ。ニヤリ。

悪い子じゃないんだが。

「ロレンツォ？」

ヘルマンは怪訝そうに言った。

まだコンラードたちと出会う少し前、ヘルマンは寄宿学校で神学を学んでいた。

「そそ、ロレンツォって言う貴族が、なんでもぎくる石って言うのを隠し持っていたらしいぜ。おい、ヘルマン、お前も創れよ。なっ、きつといい錬金術師になれるぜ」

悪友どもがヘルマンをバカにして大笑い。

神学の成績がとても悪いヘルマンのことを、級友たちはこぞってバカにしていたのだ。

それでもヘルマンは、きよとんとしていて、エジプト錬金術やヘルメス学、それにソクラテスにヒポクラテスといった哲学もかじっていた。

ついで、アポクリファにまで手を出し、司祭は彼をとつとつなじり、寄宿舎から追い出してしまったのだった。

「あんなものは異教徒が作った悪魔の書だ！ あなたには必要がない」

「ですが司祭様」

ヘルマンはスカーフを巻きなおし、負けじと言い張る。

「アポクリファの言っていることが真実ではないという証拠すらないのに、疑ってかかるのはどうかと思いますね。ソクラテスも異端者扱いされています。それなのにアポクリファだけを異端書扱いとは、どうでしょうね」

司祭は額を押さえながら、

「もういいです、アウレリアくん。さようなら」

神学の成績がよいものはよくて、ヘルマンのように哲学の精通者

はクビで破門。

当時の中世思想では、ありきたりのことだった。

神の名をかたり、免罪符を作り出した宗教。

金さえ払えば、地獄逝きを取り消すと偽って売り出す。

貴族には何倍の金で売り、農民たちには一切売らないといったこともしばしばで、ルターの改革運動は、これがきっかけで起こったようなものだった。

乗せられた貴族もバカだよ、とコンは言う。

アポクリファに感動し、クセノフォンを読みふけるヘルマンにとって、コンラードは人生の鑑でもあった。

寄宿舎を追い出され、ヘルマンはどうしたものかと立ち往生し、ケルンの町を右往左往していた。

そこをコンラードに拾われたのであった。

「お前、どうしたんだよ」

ヘルマンは自分が貴族出身ではあるが、父と離れて暮らしていて、寄宿舎に入れられ、その寄宿学校を追い出されたと告白した。

「はあん、なるほどね、お前はあれか、アンチ・クリストだろ。だったら俺がかわいがってやるよ。ついてきな」

コンは悪巧みをしていそうな、邪悪な微笑を浮かべ、ヘルマンを自分の船まで案内した。

「俺はコンラードって言うんだ。こう見えても俺は、海の覇者なんだぜ」

「コンラードさん!？」

ヘルマンは飛び上がるほどうれしくて、悲鳴を上げ、さらには握手を求めた。

「あなたがあのコンラードさんだったとは。申しおくれました、僕、ヘルマンです。ヘルマン・フリードリヒ・アウレリア！ 英雄ですものね、あなたは!」

「英雄ねえ。そんなもん、肩書きだけで終わっちまうよ」  
なぜか悲しそうにうつむいた。

「そんなこと！ だってほら、ドイツ叙事詩のニーベルンゲンだつて、デイエトリヒだつて、それにほら、フィンランドのカレワラだつて、不滅じゃないし、残っているでしょう。あなたの功績もきつと、永遠に残るはずですよ！」

「はは、けど俺は神じゃないし、なんともいえないね」  
船の上には少女が乗っていて、コンラードを呼んだ。

「こいつはソラって言うんだ。俺がお前と同じで、拾った娘さ」  
「ほう。東洋人ですね」

「らしいね。しかもコイツときたら、俺より頭いいもんだから、ラテン語やドイツ語をぺらぺら話せるんだ。まったく、いやになるね」

コンはそういって、栗色の髪の毛をかいた。

「あたしにとつて、コンは王子様以上の存在よ。そのへん、わかってね」

ソラがにっこり微笑んでいった。

「はいはい、お姫様」

な？ といいたげにコンは苦笑する。

「ソラちゃん、だっけ。僕はヘルマン」

「知っているわ。聞いてたもの」

そっけなく言うソラ。

その態度が生意気に思え、ヘルマンは少し、ムツとした。

「ソラは悪い子じゃないんだが、どこかねえ……」

コンは笑いながらヘルマンの肩をゆする。

「まあ相手は、がきじゃんか。な？ 怒るなよ。それよか、今夜は飲むぜ」

性格の悪そうなコンが、ヘルマンに好意を抱いた理由は定かではないが……。

ヘルマンは酒を飲まされながらも、その理由を考えていた。



悪い子じゃないんだが。(後書き)

ソラって生意気な娘だったのか。

コンは人がいいおっさんみたいだぞ(笑)。

フィンランドのカレワラって、ワイナミョイネンという爺さん英雄のあほなお話です。

ニーベルンゲンはいつも書く竜退治。

クセノフォンはソクラテスと同時代に生きた哲学者でした。

## クセノフォンと僕

「まったくよ。酒に弱いなら、そういつてくれよ！ たこすけ」

コンラードはヘルマンの肩を組むと、自分も千鳥足で歩き出した。

「も、もう飲めません……………」

「ばーか」

コンは赤い顔をしながら、ヘルマンを連れて船室に転がる。

「だらしなない王子様は、嫌いよ」

ソラがやってきて、コンの右手を蹴った。

「うるへー。ガキはネンネしてやがれえ」

ろれつの回らない声でコンが言った。

「ガキじゃないもん」

ふくれつつらをしてソラが言い返す。

そのうちいびきをかいて寝てしまうコンラード。

「あなたの正体を知ったら、この人……………」

ソラはヘルマンを見ながらつぶやいた。

「ヘルマンは、どう思うかな」

偉大なる錬金術師であり、魔術師ロレンツォ。

賢者の石を創造した第一人者と言われていた、学者である。

ヘルマンはこのロレンツォの弟子であるコンラードに、尊敬の念を抱いており、出会った早々からヘルマンは賢者の石の製造方法をしつこく聞いていたのであった。

「そんなもの、やめたほうがいいね」

コンはクセノフォンを読みふける。

「お、これおもしろい」

「コンラードさん……………」

「コン、でいいよ」

「ではコン、お願いです、僕に永遠の命をください」

コンは何言ってるんだ、という風な表情をした。

「何のために……」

「クセノフォンや、カエサルに近づくためです。そして神々のように」

「あつはつはつは」

いきなり馬鹿笑いされ、ヘルマンは面食らった。

「何がおかしいんですか。どうか笑わずに聞いてください」

「おかしいね。永遠に生きた、その末路がどうなったか、知らないくせに」

ヘルマンはごくりとつばを飲んだ。

「ど、どうなったんですか」

「女に恋をした、その女を愛し、裏切った英雄様は、ついに自滅した」

その話、どこかで聞いたとヘルマンはしばし考え込む。

「あ、それって、ニーベルンゲン？」

「そのとおり」

「でも彼は不老不死じゃなかったんでしょ」

「いいや。定義上はね、不老不死んだけど……」

コンはクセノフォンの著書を乱暴に閉じ、そして立ち上がった。

「愛した女がワルキューレであったから、シグルズは不幸にも死んだんだよ」

「女神は怖いつてやつですか」

「ああ、まあね。不用意に、ほしがるもんでもねえぞ、あんなのは」

ヘルマンは怒りに任せてテーブルをたたく。

「僕は女神に恋がしたいんじゃない。長く生きたいんだ！」

「どつちでも同じだろ!？」

「いい加減にしてよ。外にまで聞こえるわ」

言い合うコンとヘルマンに、ソラがやってきて一言つれなく言い

放つ。

「お前は、ディアスをどう思う？ ヘルマン」

ヘルマンは外へ出て行こうとするコンを、不思議そうに首を傾げてみている。

「バルトロメウ・ディアスだよ。アフリカの最南端を発見した」

「ああ。そんな人いましたね。僕のすべては……」

コンからクセノフォンを取り上げていう。

「これがすべてですから」

「メモラビリア（ソクラテスの思い出）か……。ヘレニカも俺はいけてると思うぜ」

「でも僕思っただけだね、コン」

ヘルマンはクセノフォンの本についたほこりを、何度も神経質そうにはらい、イスに腰掛ける。

「彼はスパルタびいきだったんだって。だから、第二部ではより詳しくスパルタのことが書いてあるんだ。けど僕は、騎兵隊長論のほうが好きだし、スパルタなんて興味ないから」

「だから、英雄に憧れるんだろ。へっ」

「だって。スパルタの英雄はみんな、ペルセウスとか、ヘラクレスとか、ギリシアの神話に傾いてしまう。僕なら断然、クツレルボか、ディエトリヒか、ジークフリードを選ぶ！」

「それはみんな、破滅的な勇者じゃねえか！ か。おまえなあ、もっと明るいほうを選べよっ」

横からソラが意地悪そうな視線で見ながら、ヘルマンに毒を吐く。

「ヘルマンには明るい勇者像なんて描き切れそうもないわよね」

ヘルマンはむっつりし、不機嫌そうにコンから火をもらうと、タバコを吸い込んだ。

「ごほ、ごほ。ああ、ちくしょう」

コンとソラは、困ったように顔を見合わせる。

## クセノフォンと僕（後書き）

ロレンツォとコンの正体？

コンラードはあのお方なんです、あのお方。

でもいいのかなー、キャラいじっちゃうけど（笑）

## 帝国の皇帝

お願いです、コン。僕に永遠の命をください！

「ばっかなこつと、ぬかすよなー……」

甲板で沖を眺めるコン。節をとって、タバコをくわえ、もてあそんだ。

「ヘルマンが願ったことは、人としてふつつでしょ」

「おまえ、簡単にいつてくれるねえ、ソラ」

船の台座に腰掛けて、両足をぶらぶらと揺らすソラ。

「不老不死はちつとも、ありがたくなんかない。だってな、俺がそうだと仮定して、お前もヘルマンもみんな、死んでしまつて俺だけ一人ぼつちで……」

言つてて切なくなつてしまつたコンラード。

胸を詰まらせ、涙をこらえていた。

「涙もろいのよね、あなた」

と、背後でソラが笑つた。

「生意気な。この海にドボンしたいか!？」

コンがソラを抱き上げて、甲板から落とすまねをした。

「やめてよ、こわいよ!」

「あーん? 聞こえねえなあ。がはは、助けてほしいなら、もういちど言え!」

「やーめーるー」

「何やつてるんだ! 危ないからよせ、コン!」

ヘルマンがやってきて、青ざめながらコンを止める。

「こ、これは冗談だつて」

なあ、とソラに肩をすくめて言うコンラード。

「コンってば、やる事が熱血だから、なんでも本気に見えてしまふのよ」

ソラは冷静を装い、ヘルマンの横を通り過ぎ、先ほどまでぎゃあすか騒いでいた娘の言葉とは思えず、ヘルマンは動揺していた。

「あいつな」

二本目のタバコに火をつけるコンが、ヘルマンに視線を流した。

「お前のこと、好きだと思っぜ」

「そんな、ばかな。あの子は僕のこと嫌いに決まってる」

コンは眉をさげて、ヘルマンのほうを見た。

「それはまた……どうして」

「彼女の冷静ぶった表情！あの顔を見たら、誰だってそう思うはずさ。もし僕を好きなら、もっと熱っぽい顔するだろ」

「あはは。お前、女つてもんをわかつちやいなねえ。だからソラになめられてるんだよ」

「もう、どうでもいいんだ、そんな。僕の愛するのはクセノフォン。それ以外ないのだから」

コンは、大きいため息をついて、同時にタバコの白い煙も吐いた。

「あいつ、だいじょうぶかな。帝国へ連れて行くの、よそうかな……」

コンラードはブルガリア帝国の皇帝、ユリアヌスに召喚されていたのであった。

コンとしては行かざるをえず、その理由というのが。

「賢者の石。ざくろ石じゃな。宰相」

宰相はお辞儀をする。

「コンラードが創ってくれる石。楽しみだ」

若干二十五歳という若さで帝位についたユリアヌス。

彼は不老不死を望み、欧州だけでなく全世界にはばをきかせたいと願っていた。

「死ぬことがなければ、永遠に余が皇帝でいられる。貴族生活の終焉は、絶えない」

「仰せのとおりで。陛下」

黄金の杯にぶどう酒を注いで、ユリアヌスはそれを飲み、のどを潤した。

「陛下、コンラードと申す、錬金術師が見えました」

皇帝はうなずいて、杯を机に置いた。

そして、正装したコンラードを待ち望む。

「コンラードでございます、陛下」

コンは恭しく頭をたれた。

「うむ、余は待ちかねたぞ。ようきた、ようきた。ささ、面を上げよ」

コンは顔を上げ、皇帝と対面する。

「聞けばそなた、ロレンツォを知っているそうではないか」

「知っているも何も、陛下。かの者は私の師匠です」

謁見の間を集まった兵士や貴族がざわつき始めた。

「静かに。……そうか」

コンは、自分を見つめる兵隊の中でも、きらびやかな鎧を着た老兵を見つけたが、すぐに彼から視線をはずした。

なんとなく誰かに似ていた、と思うコン。

それこそが、ヘルマンの父、アウレリアだったのだ。

しかしまだ、コンと隊長がつながりを持つときではない。

## 帝国の皇帝（後書き）

皇帝は賢者の石を欲していた、そしてこの熱烈な歓迎振り。  
このあとに悲劇が待っわけだ・・・。。。  
ああ、さらし首・・・。。。汗

おとうさん！

「おとうさん！」

ヘルマンが父の姿を見つけて怒鳴った。

しかし、声が届かずに父は足はやに、兵士の待合室に行ってしまった。

「そんな」

「へえ、あの人がヘルマンの？ 似てないわね」

ヘルマンはじろり、と横目でソラをにらみつけた。

「ご、ごめんなさい。悪気があったわけじゃないの」

「どうだかね」

ヘルマンはさすがに言い返すときが来た、と少々強気で語気を荒げて言う。

「ソラ、僕はねえ、もう我慢できないから言うよ。僕はソラが嫌いだ。大嫌いだ。第一印象も悪ければ、性格だっていいとはいえない。僕はねえ、もっとこう、静かで正直な子が好きだよ」

ソラは黙って唇をかみ締めたまま、くやしそくに両手でスカートを握った。

握った部分がしわになっても、ソラはまだ握っていた。

「どうして僕を引き止めたりしたんだね」

一番気になっていたことだったので、ヘルマンはソラに訪ねてみた。

「知らない。勝手に想像すれば。お得意のクセノフォンでも暗唱して」

ヘルマンもまた、ソラに対して二度、腹が立った。

「わかったよ。そこまで言うのなら、僕はどこへでも消えてやる。どうせ僕はオタクさ。多分きみが大嫌いなね。きみはコンとだけ、仲良くしていたらいい。僕にかまうなよ」

ヘルマンはソラを置いてきぼりにして、兵士の宿舎に駆け出して

いった。

ソラは一人残され、小石を蹴っていると、そこをユリアヌスが通りかかり、ソラに目をつけたのであった。

ソラは夢にうなされ、飛び起きた。

大好きなヘルマンが、赤いマントの王様に、剣をつきたてられて死ぬ夢。

おそろしい、とソラは胸を押さえる。

そんなこと、あつてはならなかった。

ソラの中では特に。

あつてはならなかったのだ、

絶対に。

「僕は平民の中で育った、貴族のくずさ。ああ、どうせそうだよ」  
ソラのいる前で、ヘルマンは大声を上げる。

ブルガリア帝国領内に入ってからというもの、ヘルマンは荒れに荒れていた。

ソラには、それがなぜなのか、皆目わからなかったが、ヘルマンのことを思うと切なくてたまらなかった。

何とか助けてあげたいんだけど。

空色の勾玉を強く握るソラ。

皇帝ユリアヌスは、ソラの勾玉に引き寄せられるかのように近寄って、声をかけた。

「やあ、お嬢さん。こんなところで何をしているの」

ソラはユリアヌスを凝視した。

……夢で見た、真っ赤な、血のように赤いマントだ。

ソラは口を利くのはよそうと決め込んで、そっぽを向いていた。

「誰か、待っているのかい」

ソラは、うんともすんとも答えないでいると、そのうちコンラードがにこやかに戻ってきたので駆け寄った。

「よお、ソラ。待たせて悪いね」

「コン！」

ソラは力いっぱいコンラードに抱きついて、思い切り甘える。

「おい、どうしたんだ、お前。それにヘルマンは？ あいつはいたいどこ行った」

気づけば、ユリアヌスの姿はどこにもなく、ソラはほっと胸をなでおろしていた。

「なんでもない。ヘルマンはきつと、お父さんのいるあそこよ」

と行って、コンに兵士の寄宿舎の場所を教える。

おとうさん！（後書き）

親子の再会。

でも一筋縄じゃいかなかったりしますんで、はい……。

もつひとつの目的？

「待て」

ヘルマンが寄宿舎に入ろうとすると、兵士たちに止められた。

「貴様なにやつ」

「通してくれ。僕は、アウレリアの息子だ」

「アウレリア隊長の、ムスコオ？」

兵士らは互いに顔を見合わせると、乱暴に肩を揺らして笑い出す。

「おかしな小僧だな。お前みたいな平民が、隊長の息子だと？ ア

ウレリア違いじゃないのかい」

兵士はまた笑い出す。

ヘルマンはバカにされたことが口惜しくて、たまらなくて、顔を

真っ赤にさせていた。

「なんだ、ここにいたのか。ヘルマン」

振り返るとコンがいた。

「コン……」

兵隊たちはコンラードを珍しそうに見て、耳打ちした。

「コンラード様ですか。お噂はかねがね」

兵士の一人が、笑いをこらえながら言った。

「どうも」

涼しい顔で返答するコン。兵士らは嘲笑の通じない相手と悟り、

顔をしかめていた。

「アウレリア違いだと？ おいヘルマン、こいつらに何か言ってや

れよ。本物のアウレリア隊長の子ですって」

「なに」

兵隊は槍をかまえた。

シヨートスピアと呼ばれるもので、短いというが、馬上用の武器

のため、リーチが長かった。

「よさぬか。その子は確かにわが息子だ」

豪華な鎧の老兵が現れた。

「とうさん！」

ヘルマンは父に近づき、手を強く握った。

「すまない、なかなか顔を見せに戻れず。かあさんはどうしている。不都合はないか」

「ありません」

兵士たちはヘルマンが本当に隊長の子と知ると、態度を翻した。

「ぼっちゃま、さあ、こちらへおいでなさい」

ヘルマンは吐き気を催した。

これがあるので、彼は貴族社会というものが嫌いだったのだ。

しかし、権力があれば、ヘルマンはましな生活ができる。

「コンラード殿……」

アウレリアは少々、困ったように腕を組み、顔をしかめてうなづいた。

「どうかしたのか」

コンが尋ねると、アウレリアは汗をふきふき、

「いや、皇帝がなにやら、あなたに頼みごとをなされたとかで」

「ああ、賢者の石ね。あんたもあの場にいたはずだが」

「……いやな予感がしてなりません。コンラード殿。今回の、やめたほうがいいのでは」

コンはヘルマンと顔を見合わせながら、

「なんでまた、そんな。俺は、それを作るためだけに呼ばれたんじゃないのか」

アウレリアは首を激しく左右に振った。

「いえいえ、とんでもない。皇帝の目的はもうひとつあるのです……さすがにそれ以上は私もわかりませんが」

「ユリアヌスめ。人のよさそうな顔をして……」

コンは握りこぶしを作った。

「用心しなされ。そしてヘルマンも」

「……はい」

これが、父との今生の別れになるとは、ヘルマンは思はずもなかった。

その後、アウレリアは謀反をおこして皇帝に殺され、みづらし首にされたと聞く。

まっぴーの目的？（後書き）

おとうさん、とうとうおはじ首に。

何で好きなんだろっ・・・時代劇！？

ざけんな！

「なに。賢者の石は創れない、だと？」

ユリアヌスは片方の眉を吊り上げ、激怒し、コンラードをなじりだした。

「余は、おまえが高名な錬金術師と聞いていたからこそ、召喚したんだぞ」

「いや、そこは召喚してやった、の間違いじゃないのかい、皇帝サ  
ンよ」

以前までの態度と一変違つて、コンラードは本来の海賊口調に戻つていた。

謁見の広間はたちまち大騒ぎとなる。

「なぜか理由を申せ、コンラード！ いったい、何が不満だ、報酬か？ 高級な羊皮紙や金銀財宝だけでは飽きたらん、とでも申したいか」

「報酬？ ずばり言おう、俺はそんなものためにここ、ハンガリーまで来たんじゃないやねえ。あんたがどんな治世をしているか、ぜひとも知れたかったのさ。それと賢者の石の材料調達。それだけさ」

「………ほう、それで、いかがであった。余の治世は」

コンは鼻で笑つてあざ笑う。

「言うまでもないね。昨日見てきた町の風景、あれじゃあ、古代に荒れ果てたという、ヒン（中国）の、長安の都も同然じゃないか。

ここに安録山でもいりゃあ、きつとお前さんに忠誠を誓い、この腹にはあなたへの服従心がつまっております、とでも答えたらうが」  
「ぬっ………」

ユリアヌスは手に持つ杯を震わせた。

「無礼であるうが。皇帝陛下の御前であるぞ！」

「御前であるうが、なかるうが、そんなこと関係ねえ。俺は賢者の石を作る材料がほしかつただけなんだよ。それもよこさない気が

「？」

「宰相。よかるう、くれてやれ」

「はっ？」

即座に返答するユリアヌス。コンは勝ち誇ったように微笑んでいた。

この時代の錬金術師の役目とは、ひとえにパトロンを探すことであつたが、パトロン探しで苦労したという。

ゆえに、肩書きをいくつも持つ学者が多かつたのは、そうせざるをえなかつたからだ。

たとえば、絵画をたしなむ悪魔の召喚者がいたりするのは、そういうことが理由である。

コンラードの場合、士官学校で実績を上げて、人気の少なかつた砲撃科に所属、それ以降は淡々と出世し、提督の地位に上り詰めた。わずか十七歳で。

若すぎる出世は、同時に波乱をも巻き起こす。

彼が錬金術に手を染めたのは、ロレンツォというイタリアでも名門の貴族だつた男の影響で、彼だけにしか作れない特別の『賢者の石』は、不老不死だけの効果を起こすとは、限らなかつた。

何が起こるかわからない楽しみを含んだ、謎の鉱石。

それが、ロレンツォ・シュトーネと呼ばれる、通常は真っ赤な血の色をしていたが、それは違い、宝石で言つとターコイズのようなものだつた。

皇帝はコンに、それを作れとせかしたのであつた。

「だから、できねえんだよ」

ロレンツォに無理やり弟子入りしたコンラードは、押し付けがましいこの皇帝に喝を入れる。

「不老不死だと。何が不老不死だ、ざけんな。あんなのは信じてはいけないものと、師匠はよく言っていたものさ。だから俺もその理

念を守ることにしていた。たった一つだけを除いては、決して作ったりしないと。そのたった一つの石は、ここにはないがね」

「ではその石を探せばいいのだな！」

「無駄だよ。俺が壊した」

即答したコンに、ユリアヌスは嘆きのため息を吐き出し、感情をぶつける。

「では余の許可を出すから、今すぐ創れ」

「ああ……これじゃ、堂々巡りだな」

コンは頭をかいた。

「まあどうしてもって言うなら、考えてやらんでもないが……俺の条件を飲むか？」

コンはにやり、と気味の悪い微笑を浮かべた。

「何だ、申せ」

皇帝は無表情で答える。

「アウレリア隊長を、俺の仲間として連れて行く。どうだ？」

一同はざわめき、興奮状態に陥った。

そこを皇帝が起立し、声を張り上げ静寂に戻す。

「残念だが、あれは昨日、謀反を起こしてなあ。即刻処刑した」

「なっ!?!」

コンとヘルマンがつい三日ほど前に会話した、あのときはまだ穏やかだったのに。

物事の、すべてが。

なにか、悪い予感がするのです。

コンはアウレリアの言葉を思い出し、ユリアヌスを下からうつむき加減で、とげとげしくにらみつける。

「どっした、いやか？」

「当たり前だ。俺は、アウレリア隊長の實の息子を連れてきていたのに。その息子に俺は、ヘルマンに対して俺は、なんと答えてやればいいー!」

「親父殿は、皇帝に敬意を払い、潔く殉職した、と」

ユリアヌスはコン以上に性格が悪いようだ。

「そうか、俺も決めたまぜ。絶対に賢者の石は、つくらねえからな」

コンは外套をひるがえして、大またに歩きながら謁見の間を去る。

ユリアヌスは再び玉座に着くと、高らかに笑い、コンラードに対して、処刑を言い渡したのであった。

ざけんな！（後書き）

この話、決してかっこいい英雄のお話でもなければ、コンラードがかっこいいってわけでもなく……いうなれば、むなしさだけを追求した話、というか。  
たぶん、救いようがないエンドです……。

あんた、オヤジ？

「ど、どうしたの、コン。急に船を出すって」

保存食を食べながら、コンは荷物をまとめてヘルマンに言った。

「親父のことは、何も聞くな」

「どういうとき。コン。ちょっと、ねえ」

「親父さん、元気でやってるからよ」

ヘルマンは背中を一向にこちらへとむけないコンラードに、不信感を募らせた。

「どういうこと。コン。言ってくれ。お父さんにもしものことがあるれば、僕はいつてあげなくちゃ、ならない」

「そういうことでもないんだ。まあ気にするな」

「何言ってるんだ。僕には皆目、見当すらつかないよ。お願いだ、コン。言ってくれ。お父さんに何が……」

「よしソラ。碇をあげる」

ソラに話しかけ、わざとその話題から逃れようとするコンラード。

「コン！」

「知らないほうがいいことだってあるだろ、お前も男なら黙っておけ！」

コンは皇帝と仲たがいできたおかげで、感情がたかぶっており、そのせいか、友人にまで怒りをぶつけてしまっていた……。

だがコンの苛立ちの裏にはわけがあり、ヘルマンの繊細な心を、傷つけたくないというそれもあった。

しかし彼の態度は、かえってヘルマンを疑心暗鬼にさせていく。

「なんだよ、それ。僕はお父さんに何かあったか、それだけを聞きたかったのに」

コンはそれ以上何も言わなくなり、沈黙を一途に守り通していたので、ヘルマンとしても聞くことが躊躇された。

「ねえ、コン」

早朝になると、目をこすりながら、自室でいびきをかいていたコンを起こすソラ。

「おきる」

コンの頭を勢いよく蹴る。

「ふげっ。鼻血出ちゃった。おいっ！　これはすっぱめ！」

「それどころじゃないわ、ヘルマンがいないのよ」

コンはいやな予感が走った。

「やあ、おはよう」

ヘルマンはいつになく、さわやかに微笑んでコンとソラに挨拶した。

「心配したんだよ」

ソラがこれまた、珍しくヘルマンを気遣う。

コンは調子が狂い、頭をぼりぼりとかいていた。

「ちよつと朝の散歩に。昨日はごめん、コンラード。僕、もう決めたからね」

「あ？　決めたって何をだ……」

「僕は見届ける。きみがこれから何をなすのかを、ね。ソラから聞いたんだ。きみが実は、もうひとつの肩書き、あの有名なローゼンクロイツ卿であることを」

コンはだらしなく、あんぐりと口を開きっぱなし。

だがすぐにソラに向き直ると怒鳴りつけた。

「しゃべったのか、このおてんば娘！」

「ごめん、だってヘルマンも仲間でしょ。だったら言うてもいいかと思ったの。それにヘルマン、この間お父さんと会ってから、やさしくなった。あのあと私にも、謝ったのよ」

「ふ、ふうん」

ふけが落ちるのも何のそので、コンは頭をかき続ける。

「やだ、きつたない。コン、オヤジでしょ」

コンはムツとしながらソラにいやがらせをはじめ。

「うわ、きつたねえ。ほんとだ、コン、オヤジになってる……………」

「・

「お前らまとめて、ふけ地獄味わえ！ がっはっはっは」

……………あんなあ、この話だけは、まじめにまとめたいの  
に……………。

あなた、オヤジ？（後書き）

まったくどうして、いつもいつも（汗）

でも今回は、ちょっと違って、この暴走も空回りするのかもしれない……。

## 俺の名前はエイリーク

一日の終わりを告げる、大聖堂の鐘の音が町に響いた。

ともすれば今度は酔っ払いどものたむろう時間でもあり、早速鼻の頭を赤くした中年や若者で、繁華街は賑わいだした。

「やけに騒がしいと思ったら、きょう、お祭りなんだね」

人々は飲めや歌えの、乱痴気騒ぎ。

さらには王や神々をかたどった大きな人形が、町全体を覆い尽くした。

「あれが北欧神オーディンだよ」

ひととき大きくて目立つ被り物をゆびさし、ソラにささやくヘルマン。

ソラはいつもと違い、やさしさを帯びたヘルマンに対し、胸がいつぱいになって小躍りした。

「どうかした、顔が赤いけど」

「ううん、なんでもない」

ここはノルウェー。

一同はどうせなら北欧を回ろうということになって、一路このノルウェーやデンマルクなどを目指したのだった。

「今日のヘルマン、なんだか、やさしいからね。ちょっと、うれしんだ」

ソラは自分の気持ちを正直に打ち明けた。

ヘルマンはその一言に緊張し、急に話しかけることに恥じらいを生じた。

「ね、ねえ。手をつないでいい？」

ソラが言つと、ヘルマンはあわてて上着で手をこすり、ソラの手を強く握り締めた。

ソラは痛みに顔をゆがめるものの、ヘルマンに悪いと、我慢していた。

コンラードは数歩後ろから街道を歩いてしたが、じつは少し嫉妬していたりする。

コンはソラに対して、ある種の保護心というか、いつも守っていた、急にそれをヘルマンに奪われたような、くすんだ気持ちに襲われていた。

それでもじぶんは、笑顔でヘルマンを認めねばならない！

そこがコンには、突かれると苦しい急所であった。

あつたのだが。

ここにまで皇帝ユリアヌスの刺客があらわれており、コンは舌打ちすると、ヘルマンとソラを引き離し、敵兵を自分のほうに引きつけておいて、やつつけようと決め込んだ。

コンが囿になり、兵士も釣られて路地裏に引き込まれる。

しかしコンの姿はどこにもあらず、兵士ふたりは戸惑いを見せ、剣を持ったまま立ち往生していた。

「よう、ご苦労なこつた」

コンは懐から最新式の回転銃を取り出し、兵士に撃ち込んだ。

「うっ！」

打たれた箇所を兵士は手で押さえ、ぶつたおれる。

二発目を撃ち込むコン。

もつひとりもなすすべなく、ぶつ倒れた。

「ぶっ。これで片付いたかなあ」

銃口から漂う白い煙を、コンは一気に息で吹き消した。

コンが仕事を終え、酒でもいっぱい引っ掛けようかというところで、きれいな娘とぶつかって、しりもちをついた。

「あぶねっ、そしてイタいっ」

「ごめんなさい、だいじょうぶ」

コンは彼女の美しさに思わず見惚れ、いっちょ口説こうかと口を開きかけたが、あとからどやどやと野獣のような男どもが一斉に

やってきて、あつというまにコンと娘を取り囲んでしまった。

「おいおい、ねえちゃんよ。何で逃げたりするんだね」

「そうだよ、おいらたちや、何もとって食おうとしねえんだから  
げへへへ、と下卑た笑いをする男ども。」

コンは物怖じせず、地面にぺつとつばを吐いた。

「何だ、いきがりやがって」

トロールのような化け物男が、くぐもった声でコンを脅す。

「てめえこそ、この俺が誰か、判って言うてるんだろうなあ。あ？」

問答無用でコンとトロールたちとの激戦がはじま……い  
えいえ、吾らがコンラード、じきに二秒ほどで、敵をねじ伏せてし  
まった。

「あうちちち、す、すまねえ、助けてくれ」

「聞こえねえなあ。もう一度ききてえんだが。ていうか、何度でも  
聞かせろや」

コンはあくどそうに、にいつと笑って、男の腕を後ろに回し、勢  
いよく折り曲げた。

「もう許せって、あうっ！」

「これに懲りて、悪さするなよ」

腕を折られた男は、去ろうとするコンにすがりつき、

「兄貴、おれをぜひ、弟子にしてくれ！」

というのだった。

「はあ？ 弟子って……」

コンは目を丸くし、トロールを見下ろしていた。

「俺の名前は、エイリーク。昔は先祖がヴァイキングだったんだ」

「おお、どつりだね。バカ力なわけだ」

コンは鼻に手をやって、くすりと笑う。

「そうそう。だから兄貴、おいらたちをぜひ連れて行ってくれ。損  
はさせねえよ」

「おい、まさか、全員ついてくる気か……!？」

あいあいさーと、男ども。

ロンはなんてことだと、額に手をやり、しばし身動きする気にも  
なれずにいた。

俺の名前はエイリーク（後書き）

なんか展開がとんでもなく進んでいく……………。汗

エイリークは海賊の中でも最強？

コンのボディガードってことで 笑

## コンの陰謀

「僕はもう、逃げたくない。逃げるわけに、いなくなっただね・  
・・・・」

ヘルマンは父の死を、数週間後、知ることになった。

「なぜ、もっと早く知ることがかなわなかったのだろう」

涙が頬を、一粒、二粒と伝う。

頬を伝うそれは、最初なま暖かかったのに、次第に冷気でひんやりした。

「コン、僕はもう、迷わないよ」

涙をありったけ流し、泣きはらした瞼でヘルマンが言った。

「僕は、後に引けない身体になったんだね。でもだいじょうぶ。僕は、父さんの子だもの。きっとコンの足手まといには、ならないからね」

「いいのか。後悔しないか？」

ヘルマンはうなずいた。

背後でエイリークとソラが、ふたりの話し終わるのを待っていた。

「いい話ですねえ、ソラさん」

コンラードより涙もろいエイリーク。

ソラは、そうね、とだけいって、ヘルマンをいとしそうに見つめる。

コンはヘルマンにブリガンディと呼ばれる古代の鎧を与えた。

「それだけでもありゃあ、ましてもんだろ」

ブリガンディはロリカ・ハマタというなめしの鎧よりは強い。

ブリガンディもロリカ・ハマタも、むかし、アテナイの戦士たち

が使ったとされるローマ時代のもので、いくらか丈夫に編まれ、鎖帷子に近かった。

ただし刺突にはめっぽう弱く、銃器類がちらほら出てきた十五世紀にそんな貧しい装備をコンがなぜ持っていたのかも疑問であるが、なぜ、それをわざわざヘルマンに与えたのか。

それは先ほども言ったように、嫉妬から出た行為である。

人は嫉妬すると、いかに冷静であろうと、とっぴもない行動にでるといふ。

コンラードも例外ではなかった、ということだろうか。

「本心を言うと、俺はヘルマンが許せなかったんだよ……………ソラ、つまり、俺の宝が奪われてしまう気がして……………」とのちに、エイリークに告白している。

ヘルマンはコンラードからいつも言われてきた、

『俺の足手まといには、なるな』

という言葉を守ろうと、たったひとりで帝国へ向かった。「決めたんだ。僕はお父さんの敵を、僕自身の手で討つ。コンの手は煩わせないよ」

ヘルマンをひとりでいかせたことに腹を立てたソラは、泣きじゃくりながら、何度も、何度も……………コンの胸板をたたく。

言葉にしようにも、ならないうめき声とともに。

「うう……………ヘルマンが……………ヘルマンが……………コンの、コンのバカッ……………」

コンラードは自分がしたことに後悔はしていない。

だから彼は、奇麗事を言った。

「あいつは、俺の手を煩わせないで皇帝を倒そうとしているんだ。」

邪魔してはならない」

だがヘルマンは所詮、学者上がりの少年に過ぎず、戦術も理解せぬまま、皇帝の餌食にされた。

コンラードの処刑命令を、これでちゃらにする、とお触れも出た。

コンはこれを待っていたのだろうか？

ソラはヘルマンが死んだことを知ると、コンにあるものをねだった。

「あれを出して。賢者の石！」

コンは鼻で笑う。

「壊したって言ってるだろ」

「うそよ。私は知っているのよ。あなたが隠し持っているという」  
とを！ さあ早く出して」

コンは、その使い道を知っていたが、震える声で尋ねていた。

「何に使うつもりか、言ってみな……」

「決まってるでしょ。ヘルマンを生き返らすの！」

コンはできない、と一言叫んだ。

「どうして。あなたのお師匠様も絶賛したほどって、前に言ったじゃない」

「だけど、とつくに俺が壊したから。もうこの世にはない」

「そんな！ 愛しているの……」

ソラは涙を連続で流しながら、コンになおも石をねだる。

「ヘルマンを、あの人を好きだから、失いたくない！」

コンはとうとう根負けし、胃の府を乱暴にたたいて、きれいな青い石を吐き出した。

「これが俺の、賢者の石だ」

それでソラの心が自分から離れなければいいと、コンは胸を痛めた。

それで、ソラに俺のそばから去らないでほしい、と願いを込めて。  
だが。

帝国でヘルマンの死体を見つけたソラは、突きつけられた現実

絶望する。

ヘルマンの全身は、槍や剣がつきたてられて、遺骸とはいえないものと化していた。

まるで武器の墓場だ……ソラはこんなとき、出雲時代の先生から自分の表現力が豊かだといわれた記憶を思い出し、泣きじやくった。

ヘルマンは人間よ。武器じゃないわ。

ソラはヘルマンの身体につきたてられた血にまみれた武器たちを、ときおり、グチャ、と肉がはがれる音がしたりするのさえ気にしないようにつとめながら、ひとつ残らず取り去る。

「ヘルマン……私、あなたを愛したのに、あなたも思ってくれたかもしれないのに、手しか握ってもらえなかった……だからこれから、ふたりで思い出、作ろう。結婚したいし……キスもしたい……」

ヘルマンの唇に、石をあてがった。

「娘」

ソラは振り返った。

声の主は、ユリアヌスである。

「よくもヘルマンを！」

「そいつが飛び込んできたのだ。父親と同じ、ろくな死に方をしなかったがな。コンラードはどうした。お前の連れであろう？ なぜいない」

ソラに近づくユリアヌス。

ソラは、コンから預かった拳銃を、ユリアヌスや兵士たちに向けた。

「動かないで、それ以上きたら、撃つ！」

「脅しか」

だがソラが撃っても弾は出なかった。

ソラは冷や汗を流し、何度も引き金を引くが無駄に終わった。

ユリアヌスが片目をつぶると、ソラは一斉に襲い掛かってきた兵

隊に捕まってしまい、ヘルマンの死体も兵士らに踏みつけられて、粉々に砕けていくさまを、まざまざと見せ付けられていくのだった。

「やめて、ヘルマンを壊しちゃだめ！」

「ソラといったか。こいつは牢獄にぶち込んで置け。あとで余が」

ユリアヌスは狡猾そうに含み笑いした。

「コンラードめ、逃げたか。後悔するがいい。お前の大事な小娘は、余が捕らえたぞ」

## コンの陰謀（後書き）

コンラード、病的ですか（汗）

しかも、やきもちって。

ヘルマンはワシのお気に入りで、こころすすな〜、と  
いいところ……。。

## いざ、皇帝に

なぜ彼は弾を一発も仕込まなかったのか。

それは、コンラード自身がソラを助けに行きたかったからである。ヘルマンではないが、彼も英雄には憧れていた。

ソラを助け、自分に心向けたいと！

だがそれはかなわなかった。

なぜならソラの心の中にいるのは、いつまでもヘルマンだからだ！

コンラード自身、英雄と呼ばれはしたが、それだけだった。

彼の行いは主に、病氣治療やけが人のリハビリで、当時、中世以前、一介の修道士だった彼にはそれだけが精一杯の『力』だったのだ。

百二十年したのち、見つかるだろう。

といった文面を、海賊をやめたコンラードはアジトの地下室に貼り出し、そのときの名は、ローゼン・クロイツという修道士であったのだが、もうひとつ、コンには肩書きが登場する。

それが、皇帝コンラード。

ユリアヌスに決闘を申し込んだコンは、ソラを賭けて勝負する。

躊躇していたコンの背中を押してくれたのは、エイリークであった。

「兄貴はそんな弱虫ですか。そんなことないと、俺は信じてますからね。ヘルマンさんを見捨てたことだって、兄貴に考えがあったからではないですかい」

「いや、違うんだ。それは」

コンは拳銃に実弾をつめ、ユリアヌスを思い浮かべた。

「俺は、はたして正しかったのだろうか。俺はヘルマンをわざと見殺しにしたうえ、愛するソラまで奪われてしまい、どうすれば俺は、

「この苦しみから救われるだろうか」

「やっときたな」

ユリアヌスはコロッセオにコンラードを連れ込み、ソラを柱にくくりつけ、鎖で縛った。

「ソラ」

コンが叫んでも、ソラはもう、コンを見ようとはしなかった。  
「あんたなんか最低よ！」

とののしるソラ。

コンは、やり場がなく、ただうつむいていた。

「ほほほ。最低だよ。だろうなあ、銃に弾を込めないなんて」  
「うるせえ。ヘルマンを殺しておいて」

「だったらなぜ、助けなかった？ お前なら、あの男ひとり救うくらい、たやすかったはずではないか」

コンはユリアヌスにつかみかかっていた手を離す。

「それは、俺がソラを愛していたから……」  
ソラは青ざめた。

なぜ今頃になって、そんなことを、と言いたげに。

「俺がソラを好きだったから！」

ユリアヌスは大笑いしながら、コンラードを殴りつけた。

「滑稽、滑稽。泣かせるじゃないか、その愛する娘にもう一度会いたい。はっはっは」

「俺は、たとえ皇帝と刺し違えて死んでも、ソラだけは助ける」  
「勝てる自信があまりのようだ」

そしてみ合ふふたり。

コロッセオからは罵声と歓声が繰り返し起こり、どちらかといえばコンラードの応援が多かった。

「やっちまえー！ 皇帝なんかやっちまえー！」

皇帝ユリアヌスは、鋭い視線を観客席に投げかけ、コンラードに

罨を仕掛けた。

コンはいやな予感がした。

「ため、爆薬を!？」

コリアヌスは手の中でもてあそぶ弾薬を見せびらかす。

「貴様と心中というのが、気に入らないがな」

「きつたねえ!」

皇帝は、爆薬に火をつけた。

逃げようにも、コンは皇帝に押さえつけられて身動きができない。絶体絶命であった。

だが、神というものは、気まぐれなのだろうか。

圧倒的に有利だった皇帝を差し置いて、明らかに不利なコンへ微笑んだ。

爆薬は、皇帝の懐にすっぽり入ってしまい、コンは逃げるチャンスを得ることができた。

「ば、ばかな! ぬわああ!」

派手な爆発音がして、皇帝は木っ端微塵となってしまった。

コンはソラを助けると、コロッセオから出ようと促す。

「いやよ、私はここに残る」

ソラは駄々をこね、しゃがみこんだ。

「どうして」

「ヘルマンと一緒に、ここに残る!」

コンは悲しそうに、力なく首を左右に振る。

「あの石、賢者の石なんかじゃないんだ。偽ものだよ」

ソラはコンを責めた。

「だましたのね、騙したのね、コン! なんてひどい!」

「さっきも言ったが、お前を愛しているから。ヘルマンなんかにお前を、とられたくなかったんだよ」

コンが背後で名を呼ばれたので、振り返ると、宰相がたっており、

「コンラード様、皇帝ユリアヌスは死にました。いかがでしょう、あなたが次期皇帝になっては」

「俺？」

ソラにどうすればいいか尋ねようとしたが、ソラはどこにもいなかった……。

あきらめたようにため息をつき、コンは答えた。

「わかった、俺は皇帝になるよ」

いざ、皇帝に（後書き）

そんな簡単でいいのか、コンよ！（汗

## 空色勾玉

この勾玉は、たったひとつだけ、一生に一代の願い事しか聞いてくれない。

だからこそ私、願いたいので……。。

ソラは空色の勾玉を握って、祈りをささげた。

荒れ野の真ん中で。

乾いた風だけが吹きすさび、水も食べ物もない大地。

ソラは願った。

愛するものの復活を。

コンと、ヘルマンと、自分がいる生活を取り戻せるなら、と。

だがしかし、コンの願いは聞き届けても、ソラの願いはあっさりとかき消されてしまった。

勾玉はぼろぼろに砕け散り、後には破片が残った。

「そんな、そんな！」

あわててソラは破片をかき集めた。

しかし不思議なことに、破片はソラの手のひらで、とけて消えてしまう。

「いやあああ！ ヘルマン、コンラード！ こんな、こんなの、  
いやあ！」

神とは、なんとも無情で、なんとも差別的な存在だろうか。

そして、無慈悲でもあり、神はソラに対して、沈黙を選んだ。

……。神は。

皇帝になったコンラードは、今よりもっと治世をよくせねばならなかったのだ、とても苦労した。

ユリアヌスの行いがいかに怠惰しておったか。

思い知らされるコンラード。その中で、彼はソラを想い、むなし

くなくなった。

「ああ、ソラ。今頃どこでどうしているだろう」

ソラは勾玉と運命を共にする少女だから、勾玉が消えたとき、ソラの命のともし火も消滅した。

死んだら、生命は大地にかえる。

ソラは蘇らなかつたヘルマンを想い、悲しく散って逝つたのだつた。

「ヘルマンよう。歴代の英雄もはかなかつたが、俺たちも……  
・はかないなあ」

コンラードは遠い昔を懐かしむように、つぶやくのだった。

空色勾玉(後書き)

簡単に終わりすぎ……。。。

しかもコンラード、きれいな事言いきだし。

ああ、ソラが……。。。

というか、うう、腰が痛い！ 汗

あとがき・・・？

というわけで終わりました。

内容に、ちぐはぐな面があったり、いやはや、すまんことです。どうも歴史に沿って、というのが苦手な苦手です。ハチャメチャが大好き。

もしこのかたが、こうだったら！？

というの好きなので、・・・いや、妄想です、多くは）汗

次は何書こう・・・汗

字数がまだ余ってるらしいので、書くぞ・・・。

ローマ時代の話は、実は少し得意です。

ゲルマニアとか、ガリア戦記とか、ポエニクス戦記とか、読みた  
い本は山積みで・・・。

でもやっぱり、読みやすいアイスランドサガに流れる自分がある！

読みやすいんです、あれは。（泣

サガは、すばらしい・・・。

今度書きましようかね。

せっかく、エイリークでできたんだし 笑

エイリークは赤毛の首長。

いわゆるゴジです。

ゴジとは、北欧の各地にいて、いつてみればムラオサですね。彼らはかなり乱暴です。

トロールはきつと、ゴジなんだろうな……。

てとゴジでゴジでゴジ。

またよろしく。

あとがき・・・？（後書き）

ああ、ほんとに腰が痛い・・・。。。  
このところデスクワークばかりで汗

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0299a/>

---

ヘルマンとコンラード

2010年10月8日15時44分発行